

学生主体型授業についての一考察

小田 隆治

(山形大学高等教育研究企画センター)

はじめに

山形大学は平成20年に文部科学省の教育GPに採択された取組として「学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト」を3年間実施した。この3年間に学生主体型授業の開発と実践に努め、ワークショップやシンポジウムの発表、ビデオ教材の作成によって、その成果を世に問うてきた¹⁾。3年間の総括の意味も込めて東京・田町にあるキャンパスイノベーションセンターの国際会議室で行った全国規模のシンポジウムは、全国の大学関係者からの申し込みが殺到し、受け付けを開始して早々に満員札止めとなり、受付を停止するほどの人気であった。

このように日本の大学の関係者の間に学生主体型授業が注目されている。いやそれは学生主体型授業という特定の授業形態だけに注目が集まっているわけではない。学生参加型授業、学生参画型授業、課題探求型授業、プロジェクト型授業、サービスマーケティング、アクティブラーニングなど高等教育の世界では様々な授業形態を示す用語が飛び交い、個々の教員のみならず様々な大学で組織的に試みられる時代になってきた。

2010年にNHK教育テレビで放映された「ハーバード大学白熱教室」が大学関係者の中で大きな話題となったのは、サンデル教授の「正義」を扱った政治哲学の興味深いテーマにもその要因があったことは確かだが、千名の学生との活発な対話型の授業法そのものに興味をもたれたことも間違いない。だが、もしこの番組が10年、20年前に放映されていたならば、日本でこれほどの話題になったとも思えない。この番組が注目されたのは、この十数年の日本の高等教育の改革、特にファカルティ・ディベロップメント(FD)の活動の成果の一つと考えることができ

るだろう。現在、日本の教育改善の一つのベクトルは新しい授業法の模索へと向かっている。そうした中であって、サンデル教授の授業は大人数の双方向型授業の成功例としてタイムリーに日本の高等教育関係者に迎えられたと言っても過言ではないだろう。

では、いまどうして高等教育において授業法の見直しや模索、そして新たな試みが展開されているのであろうか。これは大学の大量化を抜きに語ることはできない。そういった意味で、学生主体型授業が注目されているのもこの大量化を抜きに論じることはできないのである。

1. 大学の大量化と授業改善

大学が改革を迫られている原因の一つには、アメリカが先行し次に日本や韓国で急速に進行している大学の大量化をあげることができる。これは世界の歴史がこれまで経験したことがないことで、世界史上初めて生じたものである。

これまで社会の様々な場面で権力構造として秩序を作り上げ、それを維持してきた円錐形のヒエラルキーは、様々かたちでいま崩壊へと向かいつつある。ヒエラルキーの構造は最上位にいる少数者から構成されるグループが最大の利益を得る。これは初等・中等・高等教育という学校制度においても暗黙の前提とされ、高等教育を受けてきたものは社会に出て中等教育の卒業生以上の実利を得てきた。高等教育の享受は家族の社会的地位(身分)や経済状態によらず、学力という誰しもが平等なものさしによって入学を許される、という民主的な装置として機能してきた。もちろん民主的な装置がヒエラルキーを生み出さないわけではないが、社会を身分や経済状態固定化しないということで、学力による選抜で高

等教育を享受する人間の数を常時制限することは、長い間社会から容認されてきた。

近年、日本では18歳人口の半数以上が大学に入学するという大学の大衆化の時代を迎えるようになった。日本の大学が大衆化を迎えたのにはいくつかの要因がある。一つはより高い教育を受けることによって社会的地位が上がり収入が増加するという実利にある。次に、年々増加する大学進学率によって、誰でもが大学へ進学することが当たり前のような風潮が社会に蔓延してきた。誰でもが大学に入学することを可能にする経済状況にもなってきたことがこれを後押ししている。また、国としてもこの大学の大学大衆化を是とするように大学を新設し、国全体として入学定員枠を年々増加してきた。それは規制緩和によって、入学希望者と入学定員の需要と供給を調節することを放棄し、自由市場へと投げ込んでいったことによってもたらされた。こうして日本の大学の大学大衆化は急速に進行し、従来では考えられなかった若者が大学に入学してくるようになってきた。

本人が進学を望んでいないのに親のすすめによって入学してくる学生、高校の同級生が進学するので何気なく大学に入学してくる学生。もちろん以前からこうした学生は確かに存在していた。青春期のモラトリアムの期間として大学に入学してきた若者は昔から少なからずいた。しかし、もしかすると最近の若者は大学をモラトリアムとも自覚していないのかもしれない。根深い問題として、人生そのものが無限のモラトリアム化しているという無自覚性にあるのかもしれない。

誰でもが大学を選ばなければどこかの大学に入学できることになった大学の大学大衆化は、必然的に学力の低下を引き起こしてきた。従来、高等教育を受けるのに前提としていた基礎学力が著しく不足している若者が入学するようになってきたのだ。入試の選抜が効いていた時代には、基礎学力があったので、積極的ではなくともそれなりに大学の授業についていけていた。

問題は、基礎学力不足にとどまらず、勉学意欲の欠如にまで及んでいる。大学に入学したものの中には、親に勧められ世間の風潮に引きずられるように

入学した者がおり、そうした者は大学で勉強したくて入ったわけではない。こうした学生に対しては、大学でリメディアル教育によって基礎学力をつけさせようとしても、そもそも勉学意欲がないのだから教員は太刀打ちできない。

基礎学力が不足し、勉学意欲のない学生は、学習習慣が身につけていない。自主学習どころか、宿題、はたまた90分の講義をじっと席について聞いていることさえできない者が出てきている。さらには、中学校や高校時代に引きこもりでずっと学校に出席していない若者が大学に入学してきてもいる。入学当初から大学に出てこなければ、手の施しようがない。

入試が無選抜になっている大学の学生が上記のような者ばかりだというわけではない。中には基礎学力があり、それがなくとも勉学意欲はある学生がそうした大学にも一定の割合で存在している。一方、選抜が効いている大学においても、上記のような教育が困難な学生が少数であっても一定の割合で存在するようになった。つまり、日本のかなりの大学においては、教室に基礎学力があり勉学意欲に燃えている学生から、基礎学力はないが勉学意欲に燃えている学生、そして基礎学力も勉学意欲もない学生まで、幅広い若者が同居しているのである。

一見大学は偏差値で輪切りになっているように思われるが、大学の大学大衆化は入試制度を多様にし、それによって一大学に入学してくる学生の能力や意欲もかつてないほど多様になってきているのである。

文明の成熟は若者たち全体に意欲の減衰を引き起こしている。それは何も勉学意欲だけでなく、生きる意欲そのものまでを希薄にし、一部の若者たちはこの社会と時代を諦めたようにも見受けられるようになってきた。これが先述した生涯モラトリアムに結びついている。

一方で、文明が成熟したかに見えた日本は、IT、グローバル経済、地球環境問題、少子高齢化、人口減少、さらには日本経済の衰退と政治の混乱によって、誰もが予測のつかない時代に突入し、若者たちの多くは先行きにかなりの不安を抱くようになった。大学の大学大衆化にはもう一つ重要な側面がある。そ

これは従来専門学校が担当していた職業領域の教育が大学に委ねられるようになってきたことである。伝統的な大学は、少なくとも表向き、学問と一部の高度専門職業人の養成に特化していたが、現在の大学は世の中のありとあらゆる分野の職業人を養成する機関へと変貌してきている。

以上の歴史認識を踏まえると、大学の人材育成の使命が研究者や高度専門職業人の養成だけではなく、なったことを再確認しなければならない。勉学に燃える学究の徒だけが集う場所を前提とはしなくなったのである。もちろん勉学に意欲のない若者たちを自業自得だとし、落伍させる場所でもない。それは小学校、中学校、高校の責任であるということだとしても、現実を解決する力にはならない。我々大学人は時代を引き受ける覚悟が必要となった。

2. いまなぜ学生主体型授業が必要か

大衆化した大学に入学した学ぶ意欲もなければ生きる意欲もない学生には、意欲を喚起する教育が早急に求められている。しかしそうした意欲を引き出すためにはどのような教育を提供したらいいのかわからないのが現状である。それはこれまでの大学が経験したことがないので、致し方がないかもしれない。我々は失敗を繰り返しながらでも、それに勇気を持ってチャレンジしていかなければならないのだろう。

モラトリアムの学生は、以前のエリート段階の大学においても存在していた。しかし、かれらの多くは大学を卒業すると社会に出て活躍していた。自ら考え、学習し、行動していく人間は伝統的な一方的な講義からでも培われていた。大人数を対象とした一方的ともいえる講義スタイルによって、今でも学生の主体性を養うことは可能である。では、一方的な講義からかれらはどのようにして主体性を身につけていくのであろうか。それは講義を聞いて、その内容に興味を示し、より深く知りたいという知的欲求が刺激されることによる。また、講義内容に対する疑念や批判から自分で調べるようになる。さらには、講義の内容が良く分からない、これは教員の説明が不足しているのかそれとも意図的にそう仕組ん

でいたかは別として、結果として授業で話されていることの全体像を知るためには自分で調べざるを得ないのである。このように見てくると、一方的な授業スタイルで自発的に勉強する学生は伝統的な優秀な学生のイメージそのものである。現在でも存在しているそうした学生に対しては、知的好奇心や批判精神を刺激して学生の主体性を伸ばしていくことは従来と同じようなやり方でも十分に可能である。

ここで問題となってくるのは、こうした知的好奇心や批判精神を持っていない学生に対して、どのようにして主体性を身につけさせるかということにつぎくる。こうした学生の存在こそがこの問題を現代的な問題たらしめ、既存のカリキュラムや授業法の行き詰まりを露呈させているのだ。そこで従来行われてこなかった新しい授業スタイルが求められるようになってきた。

新しい授業法は単に新しいスタイルの導入というよりも、授業を学問の知識や技能の伝達に目標を設定するのではなく、学生の意欲、能動性、主体性、はたまたコミュニケーション能力や社会性、リーダーシップの育成そのものに目標を置いているところにこそ、その革新性がある。そこで用いられる学問はこうした能力を伸ばすための素材であり、教養や専門の知識の獲得を直接の目的とはしない。

低学力、低意欲の学生が大学に適応するためには、上記の学生主体型授業を入学当初に実施しなければ効果がない。そうした意味では、学生主体型授業は初年次教育の一つとして位置づけることができる。

しかし、2 単位程度の一つの授業で学生に主体性が身についたならば、誰も苦勞しないだろう。そもそも学生が高等教育で身につけるべき主体性はもっと高いレベルのものが求められてしかるべきである。大衆化した大学における低学力・低意欲の学生が大学に適応するための学生主体型授業とはそれは狭義のものでしか過ぎない。我々はもっと高次のレベルの主体性の獲得を目的としている。それは自らが考え、正しいと思うことは勇気と責任、信念を持ってみんなの前で発言し、より良い社会の建設を目指して積極的に行動する市民の姿である。多数の意見に流されたり、権威におもねったり、多勢の前で沈黙

したり、はたまた少数意見を踏みにじるような、ポピュリズムの状態にある低級な民主主義をもっと崇高なものにしていくことができる市民の育成が、本来の学生主体型授業の目標である。そのためには、大衆化した大学の学生が低次元でとどまることなく、より高みへと登っていくことが望まれるのである。

この目的のためには、学生の主体性の育成を目的としたいくつかの授業が試みられる必要がある。山形大学の基盤教育の「フィールドワーク：共生の森もがみ」の授業は体験型の授業であるが、この授業の第一の目的は狼狽ともいえる社会の中から自分自身で問題を発見することにある。自分が問題を発見する、この主体的な行為こそが学生たちの学習の原点となり、生きるうえでの原点となるはずである。発見するという行為によって、そのリフレクションとして自己や他者、社会を見つめなおすことにつながっていく。

大学は学生の主体性だけを目的とした教育を行っているわけではない。様々な学問の教授を通して教育を行っている。こうした学問分野の知識や知恵、技能を身につけさせなくてはならない。専門知識は年々飛躍的に増大している。その一方で、卒業までの4年間あるいは6年間という履修年限や総単位数は以前とは変わっていない。学士課程教育が昔の専門教育と同じものであるかどうかははなはだ疑問となっている。学部レベルで最先端の知識を授けることはもはや不可能となった。学部レベルではそれぞれの学問の知識体系の全面的な見直しが急務となっている。学部レベルの教育は専門教育から体系的な専門基礎知識へと転換が図られなければならない。

学士課程教育のカリキュラムの見直しなくして、個々の教員が自分の授業で学生に求める知識量の改変を進めることはできない。しかし、現実には個々の教員の独立した営みによって授業改善がなされている。カリキュラムの改革というトップダウンによる教育改革を述べてきたが、実際には個々の教員の改善の営みがいつか全体に影響を及ぼすようなボトムアップが組織の改革のためには重要な役割を果たすことになる。教育改革に本当に望まれているのはボトムの活性化と良いものの組織内への迅速な共有

化である。

学士課程教育として、有限な授業コマ数の中で新規授業を無際限に増やしていくことは、体系的な専門教育の解体につながっていく。対症療法的な授業を無際限に増やすことはできず、その数を絞り込んでいかなければならない。

それは学生主体型授業についても同じことがいえる。学生の主体性を確保することを目的にした授業をカリキュラムに数多く並べていくことはできない。しかし、卒業するまでには学生の主体性が確立して欲しい。このためには学問を教える伝統的な授業の中で学生の主体性を身につけさせる工夫を意図してやっつけていかなければならないことになる。このためには、一方的な講義だけでなく、学生との双方向性の確保や、学生参加型の授業法を授業に様々なかたちで導入する工夫が必要になってくる。

学生の主体性を伸ばすための授業法にはすでに様々な試みがなされている²⁾。その授業法は専門の授業で活用することもできる。たとえば、グループ学習を利用してチームでコミュニケーションをとりながらプロジェクトを遂行し、プロダクトを出すというやり方があるが、これを15回の授業の中で、1コマか2コマだけでも実施することができるだろう。あるいは90分授業の中で毎回10分程度のグループの話し合いを実施することも有効であるかもしれない。毎回グループのメンバーを変えた方がいいかもしれないし、グループの話し合いの内容を発表してもらいそれを教員が評価して活動を活性化することもできる。「グループ活動では何もしないフリーライダーがいるが、それはどうしたらいいだろうか」という質問を受けることがあるが、そうした者が出ないように工夫することは可能であるが、そもそもフリーライダーは何もグループ活動にならなかったからそうだったわけではなく、一人の時も何もしなかったはずである。特段目くじらを立てることはないだろう。グループになってそれまで静かだったクラスが盛り上がり、人間関係の構築やコミュニケーションが進み、各人の責任感が醸成されていくことも間違いない。学生は学生たちの中で競わせ協働させて育てればよいのである。

さいごに

学生に主体性を身につけさせるためには、授業を担当する教員の意識の転換と低学力・低意欲の学生を引き受ける覚悟が前提となっている。それなくして授業法をこねくり回しても決してうまくはいかないだろう。さらに、それは時代のマイナスをある標準レベルにまで戻す作業にとどまらず、崇高な民主主義を育てるといった創造的な営為を伴った教育活動である。

大学は決して新しい授業スタイル一色に染まる必要はなく、従来の一方向的な講義から斬新な自由度の高い授業までのレンジの中で、様々な授業が展開されて然るべきだろう。カリキュラムの中に多様な学問分野だけでなく、多様な授業スタイルが求められているのだ。その授業スタイルの一つとして学生主体型授業がある。

これまで大学では新しい授業法が試みられてこなかった。一方向的な講義のモノトーンが支配していた。それは恩師から弟子へと無反省に継承されてきたものであることは否めないだろう。授業とは研究と同じように試行錯誤を伴った実験である。我々は完成した授業スタイルを学生に提示する必要はなく、学生に授業に対して格闘しているリアルな姿を見せることが、学生の主体性の育成に大きく寄与するのではなかろうか。

大学の大量化は大学に試練を与えつつも、より良い時代の幕開けになる可能性を秘めている。新しい時代は新しい授業法を必要としている。

注

- 1) 山形大学の「学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト」の一連の取組はホームページ (<http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/kyouiku/>) を参照のこと。
- 2) 全国の大学における様々な学生主体型授業の実践は『学生主体型授業の冒険』(小田隆治・杉原真見編著、ナカニシヤ出版、2010) を参照のこと。